

善光寺地震の絵図型瓦版について

長野市立博物館[※] 降幡浩樹

A newspaper's map of the Zenkoji earthquake of 1847

Hiroki Furihata

Nagano City Museum, 1414 Oshimadamachi, Nagano

381-2212 Japan

A printing block of a 'kawaraban' (a kind of newspaper from the Edo period) has been discovered in Tambajima, Nagano City. It described the Zenkoji earthquake of 1847. It is rare for such an expendable item to have survived, and a clue to its origin lie in the fact that Tambajima was a 'shukuba' (a staging point for travelers). The kawaraban contains a map that gives a detailed image and explanation of the damage caused by the earthquake. This picture helped relieve people's fears.

§. はじめに

弘化4年(1847)3月24日に発生した善光寺大地震については、地震の様子を伝えるさまざまな^{かわらばん}瓦版がでまわったことが知られている(文献1)。なかでも被災地周辺で作られたとされる瓦版が多いことが特徴である(文献2)。

2000年8月に「大地震満水の図」と題された瓦版の版木が長野市内で見つかった(図1)。消耗品である版木が伝えられることは大変めずらしく、貴重な資料である。本稿ではこの版木の紹介と、被災地周辺で作られたと思われる絵図型瓦版(地図上に凡例をもってその被害状況を記した瓦版)の意味を考える。

§1. 堀家について

見つかった「大地震満水の図」の版木は、長野市丹波島の堀清巳氏の所蔵である。丹波島は近世、丹波島村と称し、松代藩領であっ

た。慶長16年(1611)に、中山道軽井沢追分宿(軽井沢町)から越後へ通じる北国街道の宿場として新たに作られた村である。善光寺へ向かう犀川渡しを控えた丹波島村は、交通上の要地であった。村高は天保の郷帳によると643石余である。

堀家には、版木伝来の経過や古文書などは伝わっていない。地震の前年、弘化3年(1846)の「丹波島村 田畑本新田高寄帳」(文献3)による個々の持高は表1の通りである。平均は3石5斗1升8合、堀家は4石5斗8升である。弘化4年(1847)2月の「宗門人別五人組御改下帳」(文献4)によると、当主重兵衛(47歳)、女房ふみ(43歳)、子逸平(17歳)と、道心である兄寛道(51歳)、はつ(15歳)が同居している。同年6月地震の混乱の中、重兵衛は組頭惣代を勤めている。安政4年(1857)「丹波嶋宿町割図」(文献5)には、問屋兼脇本陣で

※〒381-2212 長野市小島田町1414

電子メール: museum@city.nagano.nagano.jp

あった柳島市郎(良)左衛門から西に2軒目に重兵衛と見える。文久元年(1861)の「当村諸商売人別御書上帳」(文献6)によると、丹波島宿では表2のような農間稼ぎが行われていた。堀家は商売にはかかわっていなかったようである。

今のところ、堀家と瓦版を結びつける史料は見つかっていない。

表1 丹波島村所持高一覧 弘化3年(1846)

所持高	人数
20石以上	1
19石～15石	2
14石～10石	6
9石～5石	21
4石～3石	31
2石～1石	38
9斗～5斗	8
4斗～3斗	3
2斗～1斗	21
1斗未満	3

表2 丹波島村諸商売一覧 文久元年(1861)

諸商売	人数
木綿師	3
揚酒渡世	12
旅籠渡世	21
菓子職	3
煙草品々小売	4
蠟燭品々小売	1
小間物	1
揚穀小売	1
髪結職	1
水車渡世	1
荒物品々小売	1

§3. 新出の版木とその特徴

見つけた版木の寸法は縦 24.3×横 45.6cm、厚さ 1.6cm。材は桂^{かつら}。この版木から刷られた当時の瓦版が真田家文書の中に残されている(文献7)。大きさは縦 30.8×横 49.7cm で、刷られた絵図の大きさは上記版木の寸法と一致する。巷での情報把握のため、真田家によって収集されたものの一つである。

この瓦版の特徴は以下の9点にまとめら

れる。①瓦版の中でも東西南北をあらわした絵図上に、凡例をもって村の被害状況を伝える絵図型瓦版であること。②描かれている被害の範囲は水内・高井・更級・埴科・筑摩・安曇・小県の7郡に及ぶ。所領別では松代領(134 村)、幕府領(26 村)、上田領(11 村)、塩崎知行所(13 村)、松本領(5 村)、戸隠神領(3 村)、須坂領(2 村)、善光寺領(1 村)、飯山領(1 村)、椎谷領(1 村)であり、飯山領、中野陣屋管轄の幕府領の被害は書かれていないこと(表3)。③被災地名は街道沿い、犀川・土尻川沿いを中心に、行政村としての村ばかりでなく字や小字を含めた被害状況を記していること。④「姨捨山」・「八幡宮」・「康楽寺」・「長谷寺」など、災害と直接関係のない名所情報も加えられていること。⑤郡境の境界線が描かれていないこと。⑥凡例の「水多通ル」などの表現から、4月13日の犀川決壊による洪水被害も加えられ、出版はこれ以降であること。⑦犀川決壊の出水で塚(山伏塚)が崩れ、中から源海上人の入定坐像が現われ(図2)、上水鉋村(長野市川中島町)唯念寺で開帳されたことが書かれていること(文献8)。⑧版木の裏には、翌年の嘉永元年(1850)6月4日から14日にかけて山城・近江を中心とした大風雨の瓦版(図3)が彫られていること(文献9)。そこには被害の石高をオ

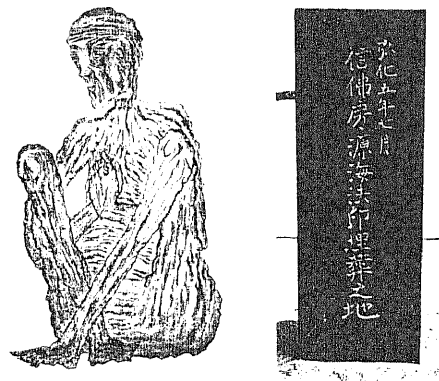


図2 源海上人入定坐像と埋葬の塚 (長野市川中島町 唯念寺蔵)

一バーに表現したり、「作者聞取不案（不安）」などと彫られている。⑨彫りが深いこと。

以上の点から、この瓦版は災害情報を迅速に伝えるというよりは、販売促進効果をねらった様々な要素が加わった瓦版といえ、瓦版の中でも後出のものと考えられる。

§ 4. 被災地周辺で作られた絵図型瓦版

災地周辺で作られたと思われる絵図型瓦版には、今回見つかった版本(瓦版)も含めて以下の6種類が確認されている(表4)。A「信濃国大地震火災水難地方全図(稲荷山宿宮匠版)」・B「信濃国大地震火災水難地方全図(稲荷山宿茂喬版)」・C「信濃国善光寺大地震絵図(宝泉堂版)」・D「信州四郡川中島大地震洪水之図」・E「信濃国六郡大地震満水之図(犀川亭山一三九版)」・F「大地震満水の図」。

以下簡単に各瓦版の特徴を見ていく。Aは稲荷山宿の小林五藤の出版である。小林は小林奎藤原茂喬と名乗り、宮大工・宮彫師として活躍し、京都御所の造営にも参加したという(文献10)。彼の上梓した瓦版は、京都の正親三条家を通して孝明天皇の上覧に供されたという。小林は安政年間(1854～59)、川中島合戦後300年を前に松代藩主真田幸教の依頼により、甲越両軍の死者の菩提を弔うため典厩寺(長野市篠ノ井)の閻魔大王像、十六善神像(図4)などの造立を請負い、閻魔像製



図4 小林五藤作 十六善神像と墨書
(長野市篠ノ井 典厩寺蔵)

作半ばで急逝した。

小林は自ら瓦版を作った動機として、「遠方の友人からの問合せに対し、いちいち応じられないのでそのあらましを出版した」としている。内容は地震による火災・湛水・洪水・山拔・潰家の情報を水内・高井・埴科・更級・筑摩・小県6郡にわたって地図に表している。筑摩・小県については街道沿いにごく簡単に書かれているのみある。

BはAと同じ小林五藤の作で、内容・図・彫とも改定したものである。図書を書いた蘭溪は、同じ稲荷山の人で、本名は田中泉(文献11)。松代藩医土師文範の子として生まれ、稲荷山の田中家を嗣いだ。狂歌を専らとし、江戸の六樹園宿屋飯盛に師事した人物である。Aとの大きな違いは以下の点である。基となる絵図の精度を高め、旧版の間違い(犀川を渡り善光寺へ向かう「荒木」・「中御所」の順序など)を訂正し、コンパスを入れたこと。被害図の範囲に安曇郡を加え7郡としたこと。特に安曇・小県・筑摩郡の被害情報については、同種の瓦版の中でもっとも詳しく書かれている。死者の数は飯山1,200人→1,545人、善光寺4,200人→2,500人、稲荷山180人→160人と訂正していること。7月21日(正確には7月20日)の裾花川決壊の情報などが加えられていること、などである。作製の順序はA→Bとなる。

Cは3枚つなぎと瓦版の中ではかなり大きく、Aの異版と思われる。Aとの違いは図右肩の説明で、地震発生からの経過に続く過去の地震の記録を死者数などに差替えている。そこには、善光寺ー15,000人、松代領ー15,000人、飯山領ー8,500人とかなり誇張した死者の数が記されている。絵図中の死者の数も善光寺4,200人→15,000人、新町(信州新町)136人→500人、稲荷山180人→200人と増やしている。他はほとんど変わらず、Aで間違えている「荒木」と「中御所」の順序や、土尻川の決壊の日時4月9日(正確には

10 日)はそのままである。犀川せき止めによる湛水や、洪水後の浸水域も売り出された当初は色摺りで示されていたが、顔料や色の具合からか現在は薄っすらとしか確認できない。版元として記された有明里にあたる村名は近世にはないが、松本・上田城下を無難と書き加えていることから、安曇・筑摩方面で発行された可能性がある。

Dはこれまで知られていなかった瓦版である。2枚つなぎの大判で、水内・高井・更級・埴科4郡を対象とし、犀川決壊後の被害状況を中心に書かれている。図右肩には地震の経過が簡単に触れられた後、裾花川・土尻川・犀川の湛水・決壊の様子が説明されている。その後に「山中水溜り等別紙ニクワシク図ス」とあることから、この瓦版はもともと2枚組であったと思われる。特徴は、松代藩による犀口(犀川の川中島平への出口付近)堤防普請の様子や、川中島平の人々が犀川決壊に備えて、小市や小松原・妻女山・綿内の山際に仮屋を建て避難している様子が描かれていること。被災地名では、高井郡の須坂、幕府領の被害状況も入っていること。摺りには4色が使われ、水害の状況も「色ノ厚薄洪水ノ甲乙ヲ知」と色の濃淡で書き分けるほど彫り、摺りともに手の込んだ瓦版であること。禁売買と摺られていること。「尤七月イタリイマダヤマズ」の表記から、発行は7月以降と思われる。

Eに描かれた被害範囲はAと同じ6郡に及び、山中の村の「潰れ」情報もAとほぼ同じである。善光寺の図像は、建物の特徴である撞木造りの様子がよくわかり、作者が善光寺を見慣れていたことを伺わせる。画工溪山については、天保から慶応期に「甲越川中島合戦略伝」を発行した川中島北原町円角菴溪山との関係が類推される(文献12)。図には「相改再板」と書かれ、7月20日の裾花川決壊の情報が加えられていることから、出版はこれ以降と考えられる。

Fの特徴は先に述べたが、これまでの瓦版と比べると、高井郡の飯山・須坂・中野陣屋領の情報が極端に省略され、逆に犀川のせき止めによる湛水、決壊後の犀口付近の被害状況が字の単位で細かく描かれている。唯念寺での入定坐像出現譚は、他の瓦版にない情報であることなどから、版木が伝えられた丹波島も含めて、川中島平で作られた可能性が高いと考えられる。

大田繁則は、唯念寺にこのミイラ出現譚を記した3枚1組の瓦版の版木が伝えられている、と記している(文献13)。残念ながらこの版木は現存しないが、大田の説明によると図右肩の説明と被害の凡例はAと同じである。最後に「這度源海法印入定の靈體出現し給ふ也 川中島上氷鉋邑 一重山唯念寺」と記されていたとされ、Aの異版と思われる(文献14)。

§5. 絵図型瓦版出版の背景

絵図型瓦版出版の背景の一つに、信濃での出版事情がある。信濃では、文政から天保期(1818~44)にかけて善光寺町(長野市)を始め各地で出版業者が現われ、その数は幕末にかけて急増する。出版物は俳書について地図・地誌の類が多いことが指摘され、人々が地誌・地図に強い関心を示していたことがわかる(文献15)。

また、文化~弘化(1804~44)年間には、絵図型瓦版と深いかわりがあると思われる民間発行の信濃の刊行国絵図が、江戸、上方、信濃で出版される(文献16)。善光寺地震の災害図として有名な「弘化丁未春三月廿四日信州大地震頗川塞湛水之図」と「弘化丁未夏四月十三日信州犀川崩激六郡漂蕩之図」を出版した版元の一人、江戸日本橋の山城屋左兵衛は(文献17)、「信濃国大全図」と題する色摺りの木版国絵図も刊行している(図5)。両者の間には、絵図製作に関してなんらかの人的交流があったことが類推されている(文献18)。刊行国絵図と絵図型瓦版との共通点は、以下

の4点が指摘できる。①色摺の絵図型瓦版に使われている道路は赤、郡境は黒、駅(■)、村(○)の凡例は、民間で発行された国絵図と同じであること。②Dの瓦版に摺られた「禁売買」の文字は、信濃の国絵図ではよく目にする特徴で、国絵図も無届出版のものが多いこと(文献19)。③国絵図に必ず記される郡界の境界が、F以外の瓦版には全て記されていること。④名所・旧跡などの情報が盛り込まれていること。

刊行国絵図は、全国の半数を越える国で発行されたが、民間の需要とも関連して刊行の有無、種類にはばらつきがある(文献20)。信濃の刊行国絵図は、9種類が確認されている(文献21)。多くの国と国境を接し、盆地と河谷は山地により分断されるという信濃の地理的特徴から、自らの住む地域の認識のため、また、善光寺参詣などの需用に応じて多くの種類が刊行された。

絵図型瓦版の版元は、これら民間の刊行国絵図などを参考に、被害の大きかった地域は字や小字単位の災害情報を書き加え、「姨捨」や「久米路橋」などの名所情報も取り入れて出版したと思われる。

これに対し、買い手はこの瓦版にどのような情報を求め、読み取ったのだろうか。一つは、遠方からの道中案内図的な役割を期待したと考えられる。善光寺地震は、折からの御開帳に全国から集まった多くの参詣人を巻き込み、その被害を大きくした。善光寺町やその周辺には、地震後も被災した家族や親類・縁者の安否確認、亡くなった人の遺骸を引き取りに全国各地から多くの人々が訪れていた(文献22)。尾張藩では、多数の領民が開帳に参詣し被災したため役人を派遣し、宿場や村々から安否の聞き取りを行っている(文献23)。土地感のない遠方の人々は、この瓦版から広域な災害情報と自らの道中情報との双方を読み取りながら被災地を訪ね、あるいはその情報を郷里に持ち帰ったと思わ

れる。

稲荷山の小林が最初に作ったAの瓦版は、遠方からの災害状況の問い合わせ(土地感の無い人々)に大いに利用され、販売から約1ヵ月後には、改訂版を発行するほど人気があった。改定したBの瓦版では、絵図の精度を高め、より広域な災害情報が盛り込まれていることから、人々がそうした災害情報を求めていることを示している。

もう一点は、この時期信濃でも全国的な商品生産・流通の発達と地域市場形成の動きが進行していた。松代藩士水井忠蔵は、地震後水内郡の西部山中を廻村して次のような報告を藩の勘定所に提出している(文献24)。「山中の村々では、往来の道筋が山抜け等で通行できず、牛馬による駄賃稼ぎ(中馬)で生計をたてている者は困っている。さらに、山中第一の産物である麻・紙・細美(麻布)を新町・善光寺・稲荷山に送るのに、この三ヵ所が被災し代金を受け取れない。また、これらの産物を諸国へ売ることままならない。他の地域との商品・技術・文化などの情報交流が格段に進み、広域の災害情報を必要とした人々の増加が背景にあったと考えられる。」

瓦版同様、善光寺地震の時に語られた「譬女口説地震身の上」の口説き節には(文献25)、「土農工商儒仏も神も／道を忘れて利慾に迷い／上下分かため奢りをきわめ……」と、地震の惨害描写につづけて、武士・町人・儒者・僧侶・神官・医者から奉公人・日雇い人にいたるまで、金銭欲のとりこになり、贅沢ばかりを求める当時の人々の姿が活写されている。ここからは、瓦版の購入を可能とした庶民の生活力の向上を読み取ることができる。

絵図型瓦版は、瓦版を出版することを可能とする木版印刷技術の進歩と、広域災害情報を求める人々がいて多くの版が発行されたのである。

§まとめ。

地震などの自然災害により、日常生活が突然断ち切れ、さまざまな噂や憶測がとびかう中、瓦版は災害状況を伝える最初のメディアとして商品価値を有した。武蔵国柴崎村(東京都調布市)の鈴木平九郎の「公私日記」によると、3月晦日には善光寺地震の評判・読売(瓦版)が江戸中に満ちたと記されている(文献 26)。名古屋には旅人等の風聞により、3月29日に地震の情報が伝わり、4月4日には瓦版が作られ発行されていた(文献 27)。

今回分析した絵図型瓦版は、広範囲な被災情報を収集し、地図へプロットし、色刷りして仕上げるなど、文字や挿絵を添えただけの瓦版より手間と時間がかかった。そのため、同じ瓦版でも発行は遅れ、地震の速報性といった商品価値ではなく、これまでに無い新しいタイプの瓦版として売り出された。そこには、情報そのものの信憑性はともかく、広範囲な災害情報を絵図上で確認でき、記号化された被害状況からは被害の有無などを客観的に認識することができた。

こうした瓦版を作る事が可能な場所は、広範囲な情報収集が可能であり、彫り・摺りなど出版を支える職人が確保できた宿場であった。今回紹介した堀氏の版木や、稲荷山的小林の瓦版、軽井沢追分宿の出版業者・丸屋与六が発行した瓦版(文献 28)などは、これらを裏付けている。また、宿場にはこうした情報を買求める不特定多数の買い手・読み手がいた。大地震満水の図の裏に彫られた上方での大風雨の瓦版は、上方の災害情報であっても信濃の地で買い手がいたことを示している。

善光寺地震は未曾有の大地震であった。更級郡森村(更埴市)中条唯七郎の「徒然日記附地震大変録」には、3月24日から12月15日晩までの間、地震を感じない日はわずか4日間であったと記されている(文献 29)。同じく更級郡小船山村(戸倉町)の緑川与市は、地震発生から嘉永6年(1853)までの地震発生

状況を記録した「大地震寄(揺)日記」を残している(文献 30)。日記では、嘉永3年に「家が潰れる」と感じた地震を1度、嘉永6年になっても「家から飛び出す」ほどの大揺れを2度感じている。人々は地震発生直後だけでなく、長期にわたっていつでも戸外に避難できるように用心し、地震におびえながら暮らしつつづけていたことがわかる。

人々は地震の大きさとその後の余震に恐怖し、無意識に災害の全体像をつくり上げようとした。被害範囲と具体的な被害状況を知ることによって安堵しようとしたのである。絵図型瓦版は、こうした漠然とした恐怖の対象である災害を具現化(地図上に全体像を示す)し、災害像を呈示することで、災害の終焉を示す行為であった。そこには、いつまでも続く地震の恐怖や緊張を癒す鎮静効果があったのである(文献 31)。

謝辞

本稿作成にあたって、版木所蔵者の堀清巳氏を始め、瓦版その他の資料所蔵者、及び所蔵機関の方々に多大のご協力を賜った。また、北原糸子氏には、貴重な御助言を賜った。記して謝意を表します。

文 献

- (1) 北原糸子、1998、善光寺地震の災害情報、善光寺地震—松代藩の被害と対応—、長野市教育委員会(松代藩文化施設管理事務所)
- (2) 今田洋三、1978、江戸の災害状況、江戸町人の研究5巻、吉川弘文館
- (3) 鈴木良知蔵(長野市丹波島)
- (4) (3) 同
- (5) 柳島慎一蔵(長野市丹波島)、更級埴科地方誌刊行会、1980、更級埴科地方誌3巻、近世編上

- (6) (3) 同
- (7) 国文学研究資料館史料館, 1978, 信濃国松代真田家文書目録第 28 集, 真田家文書あ 3456 番
- (8) ・河原綱徳, 1973, むしくら日記, 新編信濃史料叢書第 9 巻, 361pp
・西田直養, 1974, 笹舎漫筆, 日本随筆大成Ⅱ・3, 吉川弘文館
- (9) 続徳川実紀では, 山城国の大雨は 6 月 5 日とある. 新訂増補国史大系統徳川実紀, 1976, 吉川弘文館
- (10) 稲荷山四百年の歩み編纂出版委員会, 1974, 稲荷山四百年の歩み
- (11) 矢羽勝幸, 長野県俳人名辞典, 1993, 郷土出版
- (12) 矢羽勝幸, 1993, 近世信濃の出版目録 近世地方出版の研究, 東京堂出版
- (13) 大田繁則, 1937, 川中島を主体とせる弘化震水災雑考 (5), 信濃第 6 巻第 10 号
- (14) (8) むしくら日記 (387pp) では, 「川中島の内にても塩崎領地震潰水押杯部分にしたる絵画売たり, 人の持居たるを借見しか, 山中辺杯大に違たる所も有し」とある. 唯念寺のある上氷鮑村は, 塩崎知行所領.
- (15) 大和博幸, 1993, 地方書肆の基礎的考察, 近世地方出版の研究, 東京堂出版
・文政～天保期: 善光寺町・小枹屋喜太郎・石川藤八, 川中島・松屋平助, 稲荷山宿・橘葉堂, 松本 (松本市)・高見屋・岩本平蔵など
・弘化～慶應期: 善光寺町・蔦屋伴五郎, 上田 (上田市)・上野屋三郎助・柏屋宗兵衛・福屋惣兵衛, 松本・嶋屋与市, 中野 (中野市)・平野屋恒七, 須坂 (須坂市)・佐渡屋兵右衛門, 小諸 (小諸市)・小山岩蔵, 軽井沢追分宿・丸屋与六など
- (16) 栗田元次, 1963, 江戸時代刊行の国郡図, 歴史地理 84-2
- (17) (1) 同
北原糸子, 1999, 災害絵図研究試論, 国立歴史民俗博物館研究報告第 81 集
- (18) 北原糸子, 2000, 災害図の販売戦略, 第 17 回 歴史地震研究会講演要旨集, 歴史地震研究会
- (19) (16) 同
- (20) 三好唯義, 1988, 絵図のコスモロジー, 近世刊行国絵図の書誌的検討, 地人書房
- (21) 長野市立博物館, 1998, 信濃国絵図の世界
- (22) 東京大学地震研究所 (編) 1988, 新収日本地震史料, 第 5 巻別巻 6-1, 749pp など
- (23) 東京大学地震研究所 (編), 1988, 新収日本地震史料, 第 5 巻別巻 6-1, 494pp
- (24) 東京大学地震研究所 (編), 1988, 新収日本地震史料, 第 5 巻別巻 6-1, 233pp
- (25) 榎沢龍吉, 1976, 叙事民謡善光寺大地震, 銀河書房
- (26) 東京大学地震研究所 (編), 1988, 新収日本地震史料, 第 5 巻別巻 6-2, 1813pp
- (27) 近藤晴一, 1997, 文政～弘化期の名古屋の災害情報, 信濃第 49 巻第 2 号
- (28) (1) 同
- (29) 更埴市史編纂委員会, 1988, 更埴市史第 2 巻 近世編
- (30) 戸倉町誌編纂委員会, 1999, 戸倉町誌第 2 巻 歴史編上
- (31) 北原糸子, 1983, 安政大地震と民衆, 三一書房

[illegible][illegible]

「大地震満水の図」裏・解説文

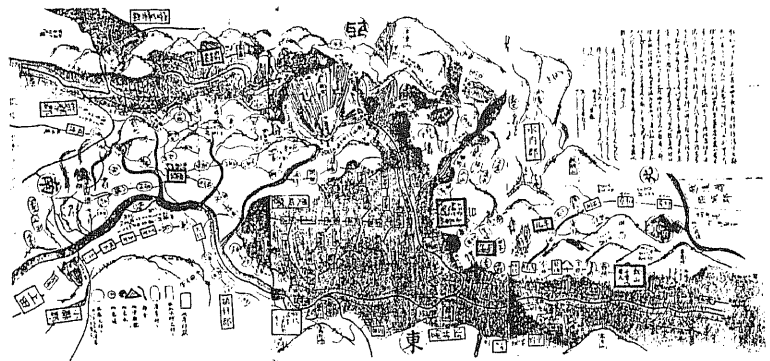
表3 「大地震満水の図」に書かれた被災地名一覧

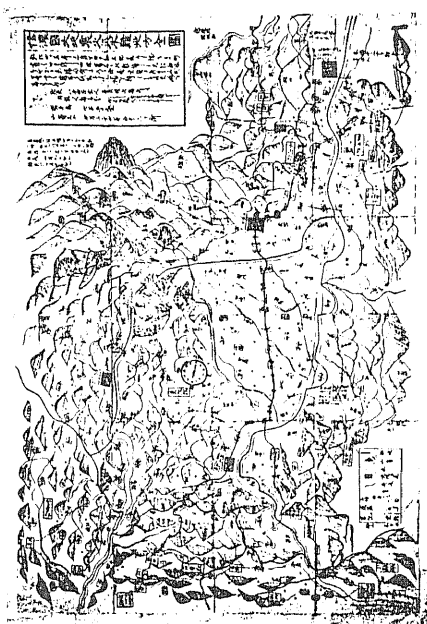
北国街道	北国脇往還 (尊光寺道)	川中島通りの村々※	川北通りの 村々※	土尻川通り 大町道	土尻川通り 大町峠道	犀川右岸の村
上田 [上田領]	松本 [松本領]	青木シ(青木島) [松代領]	市村 [松代領]	小シバミ(小柴 見)[松代領]	水内 [松代領]	安ニワ(安庭) [松代領]
塩ジリ(塩尻) [上田領]	岡田 [松本領]	ツナ嶋(綱島) [松代領]	千田 [松代・幕府領]	久保寺 [松代領]	はしハ(橋場) [松代領]	平林(平井) [松代領]
ネスミ(鼠) [松代領]	刈ヤ原(刈谷原) [幕府領]	大塚 [松代領]	川合 [松代領]	小市 [松代領]	長井 [松代領]	三水(三上) [松代領]
中の条(中之条) [幕府領]	会田 [幕府領]	ましま(真島) [松代領]	松岡 [松代領]	飯森 [松代領]	山上条 [松代領]	スマキ(須牧) [松代領]
坂本 [幕府領]	青柳 [幕府領]	木川合(本川合) [松代領]	豆シマ(大豆島) [松代領]	セウキ(瀬脇) [松代領]	大田 [松代領]	吉原 [松代領]
上戸倉 [幕府領]	をみ(麻績) [幕府領]	シマ牛(牛島) [松代領]	平林 [松代領]	サ平(笹平) [松代領]	上条 [松代領]	竹房 [松代領]
下戸倉 [幕府領]	中原 [松代領]	小嶋田 [松代領]	高田 [松代領]	大安シ(大安寺) [松代領]	新町 [松代領]	下ノバ(下市 場)[松代領]
シヤクマク(寂時) [幕府領]	桑原 [松代領]	下水カノ(下水鉋) [松代領]	栗田[幕府領・ 戸隠神領]	五十リ(五十里) [松代領]	久木 [松代領]	イオリ(伊折) [松代領]
矢代(屋代) [松代領]	稲リ山(稲荷山) [上田領]	中水カノ(中水鉋) [松代領]	和田 [松代領]	中条 [松代領]	越トラ(越道) [松代領]	牧シマ(牧之 島)[松代領]
しの井(篠ノ井) [塩崎知行所]	シホ崎(塩崎) [塩崎知行所]	サカイ(境・中水鉋) [上田領・塩崎知行所]	七セ(七瀬) [松代領]	青木 [松代領]	シオ(潮) [松代領]	南牧 [松代領]
見六 [塩崎知行所]	へくべ(平久保) [塩崎知行所]	戸ベ(戸部) [上田領]	長池 [松代領]	ナライ(奈良井) [松代領]	ホカリ(穂苅) [松代領]	原一八(原市 場)[松代領]
御平川(御幣川) [松代領]	しの井(篠ノ井) [塩崎知行所]	北戸ベ [上田領]	村山 [松代領]	竹生 [松代領]	大原 [松代領]	今泉 [松代領]
高田 [松代領]		藤牧 [松代領]	北中 [松代領]	イヲリ(伊折) [松代領]	日名 [松代領]	灰原 [松代領]
南原 [松代領]		カラ臼(唐臼) [松代領]	中又(中俣) [松代領]		ハシ木(橋木) [松代領]	牧田中 [松代領]
北原 [松代領]	北国脇往還 松代通り	会 [松代領]	風マ(風間) [松代領]		タカヤ(高合) [松代領]	和田 [松代領]
三ツ又(三ツ俣・今 里) [上田・幕府領]	矢代(矢代) [松代領]	ヒロ田(広田) [松代領]	小シマ(小島) [松代領]	八幡道沿いの村	カヤ(鹿谷) [松代領]	吐咽 [松代領]
上ヒガノ(上水鉋) [塩崎知行所]	雨宮 [松代領]	神明 [松代領]	長ヌマ(長沼) [幕府領]	田原 [松代領]	小嶋 [松本領]	川口 [松代領]
北ヒガノ(上鮑村) [塩崎知行所]	土ロ [松代領]	水沢 [松代領]	コマサワ(駒沢) [幕府領]	岡田 [上田領]	フナバ [松本領]	安川 [松代領]
丹波島 [松代領]	岩の(岩野) [松代領]	キネフチ(柞瀬) [松代領]	トミ竹(富竹) [幕府領]	五明 [松代領]	の平(野平) [松本領]	大田和 [松代領]
吹上 [幕府領]	キノ(清野) [松代領]	アラホリ(荒堀) [松代領]	アカヌマ(赤沼) [幕府領]	二柳(二ツ柳) [松代領]		町田 [松代領]
アラキ(荒木) [幕府領]	松代 [松代領]	中沢 [松代領]	カナハコ(金箱) [幕府領]	方田 [松代領]		下岡(下大岡) [松代領]
中ノ御所 [椎谷領・松代領]	東寺(東寺尾) [松代領]	トブクシ(東福寺) [松代領]		石川 [松代領]	戸隠道沿いの 村	長セ(長瀬) [松代領]
新田(妻科村) [松代領]	西寺ヲ(西寺尾) [松代領]	小モリ(小森) [松代領]		長谷 [松代領]	アラ安(荒安) [松代領]	代 [松代領]
善光寺 [善光寺領]	田中 [松代領]	ヨコ田(横田) [松代領]			上の(上野) [戸隠神領]	平 [松代領]
ヨコ山(横山) [松代領]	シバ(柴) [松代領]	今里 [上田・幕府領]			戸隠山 [戸隠神領]	越中川[松代領]
相木(相ノ木) [松代領]	牧シマ(牧島) [松代領]	三沢(今井) [塩崎知行所]		八幡宮 (武水別神社) 周辺		佃み(佃見) [松代領]
吉田 [松代領]	大ムロ(大室) [松代領]	カイ沢(今井) [塩崎知行所]		八幡 [松代領]		桐沢[松代領]
イナツミ(稲積) [松代領]	川田 [松代領]	小森沢(今里) [上田・幕府領]		志川 [松代領]		下生坂[幕府領]
	牛シマ(牛島) [松代領]	今井 [塩崎知行所]				上生坂[幕府領]
	ワタ内(綿内) [須坂領]	中シマ(中島) [松代領]				
	福シマ(福島) [松代領]	四ツヤ(四ツ谷) [松代領]				
	村山 [幕府領]	小松原 [松代領]				
	中シマ(中島) [幕府領]	かじや(鍛冶屋・上水 鉋) [塩崎知行所]				
	相ノ嶋 [松代・幕府領]					
	不明					
	須坂 [須坂領]	※は松代藩の支配区分の名称				

表4 地図型瓦版比較表

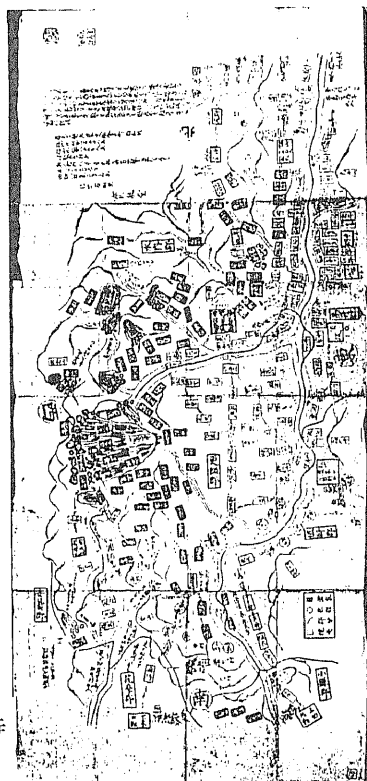
	A	B	C	D	E	F
名称	信濃国大地震火災水難地方全図	信濃国大地震火災水難地方全図	信濃国普光寺大地震絵図	信州四郡川中島大地震洪水之図	信濃国六郡大地震満水之図	大地震満水の図
大きさ (横×縦 /cm)	85,8×41,4	62,2×41,4	91,3×41,2	61,7×43,6	59,2×39,4	49,7×30,8
紙継(cm)	3枚(1紙29,3/ 2紙27,4/ 3紙30,2)	2枚(1紙30,8/ 2紙31,4)	3枚(1紙32,0/ 2紙28,0/ 3紙32,8)	2枚(1紙31,2/ 2紙30,5)	1枚	1枚
摺	色摺	色摺	色摺	色摺	墨摺	墨摺
凡例	此角印駅	郡堺	潰家	宿	此印駅	地震少々
	水入水押之村々	山崩	無難	村	地震潰多	同水多通ル
	潰家村々	水	郡分	郡堺	同焼失	同人死多
	郡分	焼場井道	焼失	神社	同少々	同満水多
	此印類焼	舟渡		道路	同満水家流	同流家多
	此色水	潰		山崩	同五分七分流	同火事人死多
	此色道			水内郡	同水押	
	無難之村々/但一分三分之潰家/何レモ有之			高井郡		
				埴科郡		
				更級郡		
				水色川筋漂蕩/但以此色/厚薄洪水之甲乙ヲ知		上水飽村一重山唯念寺へ此度源海上人入定坐像出現也
版元など	稻荷山住宮匠	上梓稻荷山宿茂齋	信陽有明里宝泉堂	兼売買	輝川亭山一三九	
		画工蘭溪			相改再板画工溪山写	
		書記栗軒				
		彫工泉雀刀				
発行(推定)	6月末	7月21日以降		7月以降	7月20日以降	
所蔵者	当館	長野県立歴史館	三井文庫	当館	国文学研究資料館史料館	国文学研究資料館史料館

A 信濃国大地震火災水難地方全図

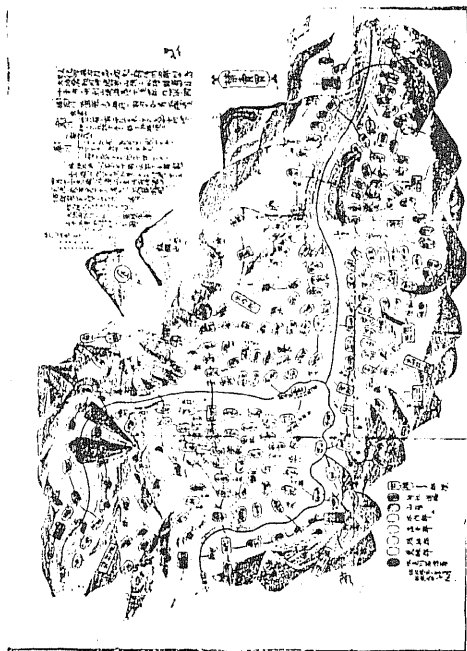




B 信濃国大地震火災水難地方全図



C 信濃国善光寺
大地震絵図



D 信州四郡川中島大地震洪水之図



E 信濃国六郡大地震満水之図

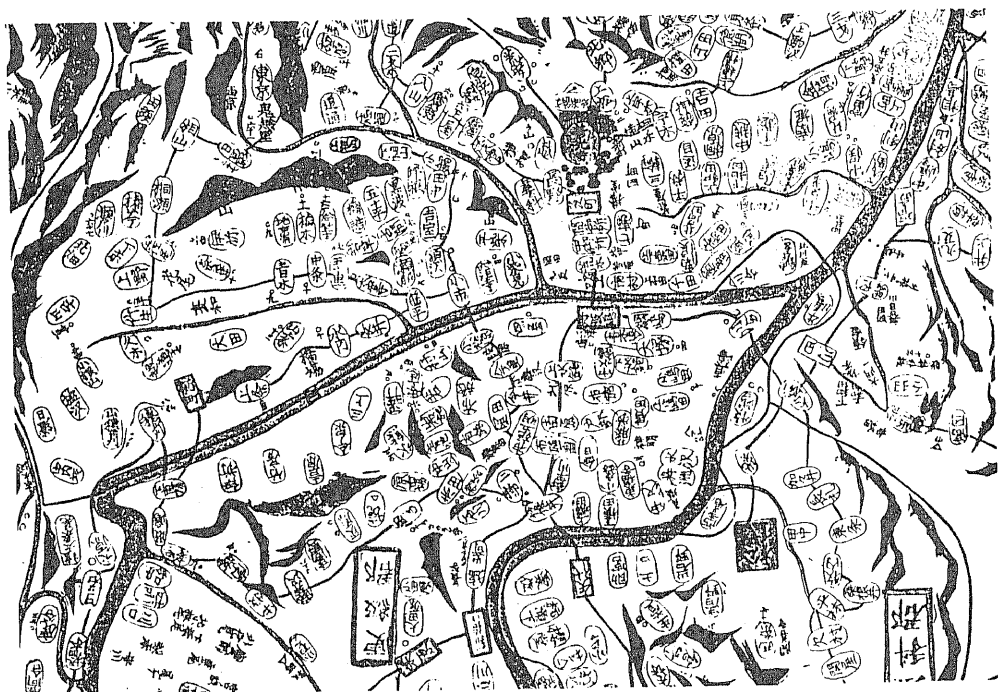


図5 「信濃国大全図」(上)と「弘化丁未春三月廿四日信州大地震顔川塞湛水之図」
(下)の善光寺周辺の比較